

富來先生の追悼によせて 相撲の神「日田殿(ひたどん)」

森山和徳

日田市の北東に慈眼山永興寺(大蔵氏の氏寺)、その麓に日田神社あり。この神社は相撲の神で日田の郡司大蔵鬼太夫永季ながすえを祭っている。永季は平安末期(歿一〇五六年)大蔵氏の嫡子(郡司)として生まれる。知力・体力ともに勝れ他を圧し背丈六尺六寸(ニメートル)、米俵四俵(二百四拾キロ)を軽々と持ち上げる剛力は九州一円に知れ渡った。永季十六才の時、その勇猛ぶりが後三条天皇の耳に達し、延久三年宮中の相撲の節会に召し出され、それまで天下無敵とほこった出雲の小冠者を倒し、以来四十九才に至るまで十五度の節会に召されて総て勝利をおさめ、三十五年間にわたり日本一となる。

永季は相撲を通じ日田地方の政治・経済・文化の高揚につとめ、領民からは日田殿と呼ばれ尊敬されている。この日田神社には日本相撲協会が日田巡業のときは必ず代表が参拝し、境内には双葉山・前田山・男女の川・千代の富士・貴の花の顕彰碑もある。永季は長治元年の節会に召されての帰途、病魔に犯され、小倉からの近路をとり豊前の香春峠・小石原峠を越え故郷日田の山々を遠望して、「我が日田の地を踏まずば断じて死せじ」と高熱を押しして進み、一步故郷の地に踏み込んで、その国境の峠で腰をおろし、「むこうに見えるは村かすすきか」と尋ねたのを最後に四十九才の生涯を終えた。その峠道の少し上に大蔵鬼太夫永季の墓あり。墓地には墓二基あり、一基は新しく「大蔵鬼太夫永季の墓」、長治元年甲夫逝去、文化九年占凡七百九年、子孫再営定と碑文あり。後の小さな墓は「鬼太夫臣の墓」と銘あり、殉死した臣の墓であろう。この墓のある字地名は現在でも「むらすすき」の地名が残っている。この地から六百米程下って村里のよく見える山を、この附近の人々は殿山(どんやま)と呼んで山の頂きには小さな社を建てて敬祭している。天覧相撲のほうびとして大江匡房の書「大波羅野御屋新呂」の勅額が大原宮の宝物として納まっている。

富來先生の教えを受けて、歴史的考察の一文をもした次第である。御冥福をお祈りする。